

むしろ行為主体の現実態、すなわちエッセにもとづいて理解されている、との指摘 (p. 117, 122, 132, 163) などであろう。こうした「行為」理解は、一見「行為」とは対立的な受容、非活動の状態と思われるものが最高の活動であるとのパラドックスを呼びおこすが、著者は最終章で殉教、観照的生活に関するトマスの論述、および東洋哲学における「行為」観などを素材にして、右の「行為」理解を説得的なものにしようと試みている。

本書は13世紀の「哲学的文法」についての詳細かつ正確な理解にもとづくものではなく、また神学者トマスを論理・言語分析哲学者に還元するきらいがある、などの点で、哲学的研究としては重大な難点をふくむといわなければならない。しかし、本書のうちにはこれまで閑却されがちであったトマスの神学・哲学の側面についての優れた洞察や卓抜な議論が数多く見出され、トマスを「見直す」試みへむけての第一歩としての役割をはたすことは間違いない。とりわけトマスの神学・哲学用語になじみの薄い現代哲学者にとっては貴重なトマス入門書の一つであるといえるであろう。

- (1) Vernon J. Bourke, *The New Scholasticism*, Vol. LIV, 1, 1980, pp. 109—111 における書評。
- (2) Mark Jordan, "Modes of Discourse in Aquinas' Metaphysics", *The New Scholasticism*, Vol. LIV, 4, 1980, pp. 401—402.

Werner Beierwaltes : *Identität und Differenz.*

Frankfurt am Main, Vittorio Klostermann, 1980. (Philosophische Abhandlungen, Band 49), 328 Seiten.

小田川方子

この書物は、現在西ドイツのフライブルク大学哲学科正教授であるバイアーヴァルテス氏の最新の著作であり、数年前に出され、当誌第17号、1975年に熊田陽一郎

氏によって紹介された『プラトン主義と観念論』の根本思想を、「同一性と差異性」の観点から、更に深化発展させたものである。これは、十一の論文より成り、その中には、このテーマを意図して書かれ、既に発表された論文五篇が、一部変更ないし拡大されて含まれている。当誌の前号で八巻氏によって紹介された『同一性と差異性』の論文は、その一つである。

「同一性と差異性」の概念は、著者によれば、形而上学的思考を本質的に定めているものである。この主張を、著者は、古代から現代に至る主要な哲学者の思想に即して明示する。方法論的には、この書は、弁証法的な「諸地平の融合」を目指すガーダマーの解釈学を、思想史の次元に応用したものと見做されることができよう。例えば、この本の重要な部分の一つである「プラトン主義のキリスト教神学への変容」は、異質の二つの地平の融合であり、更に著者によれば、それは、「差異性の中の同一性」という根本的にプラトンの主題の歴史的な一形態である。つまりそれは、具体的な思想史の中で、同一の主題が、連続性を保ちながら変容していく過程を示している。それ故、この書では、主題と方法とが、相対応しているといえるであろう。

「同一性と差異性」の問題は、著者によれば、プラトンの意図を出発点とするものである。著者は第一の、『非-存在は^{ある}。——プラトン弁証法の要素としての同一性と差異性』という論文で、プラトンの思想を、存在の中に、他-存在ないし区別、差異性、多性の意味での非-存在を想定するものと解釈する。このプラトンの思考は、差異性を哲学的に妥当し得ぬものとして排除して、純粋な同一性としての「存在」を立てたバルメニデスの存在理解を変容させたものである。著者によれば、プラトンによるかかる差異性の発見に基づき、同一性は、もはやそれ自体の中に^{固定されない}同一性、多様な関係の集中心となった。

このプラトンの思想を基礎として、この書の構成は、大きく見て四つに分けられる。第一は、「同一性と差異性」の関係の歴史的展開の最初の大きな局面としての、プラトン主義におけるこの問題の概念的形成とそのキリスト教神学の中への変容の時期であり、プロティノスを中心とした新プラトン主義とマリウス・ヴィクトリヌスが扱われる。第二は、中世初期から中世の完成および近代への変革の時期に相当し、アウグスティヌス、マイスター・エックハルトおよびニコラウス・クザ

ームスにおいて範例的に示される。第三は、ドイツ観念論での展開であり、ジョルダノ・ブルーノと、彼の思想のシェリングによる受容およびヘーゲルの弁証法が扱われる。第四では、現代の哲学の内部で、「同一性と差異性」への問いは、特にハイデガーとアドルノにおいて中心的主題であるとされ、この両者の思想が考察される。

著者はまず、『差異性の中の同一性——新プラトン主義的思考における差異性の機能について』という論文で、他性または区別ないし差異性が、同一性・一性の概念と共に、存在および思考の弁証法的構造の要素であることを明らかにする。プロティノスの「一者」は、一切の他者から異なったものであり、「絶対的差異性」であるが、それは、自分自身からは異なっていない、自己において無差別的なものと考えられる。無差別は、したがって、純粋な一性、絶対的同一性、非-多性と同じ意味のものと理解される。この一者の自己展開において、一切の存在者の多性が生ずるが、第一の多性ないし他性は「精神」（ヌース）である。これは、差異性の中で自己自身を思考する同一性であるという弁証法的構造を有する。この思想を最も精緻に体系化したのがプロクロスの哲学であり、プロクロスの思想が最も影響を与えたのは、偽ディオニシウス・アレオパギタの哲学的神学である。偽ディオニシウスの意味では、神は、同一性かつ差異性であり、両方のパラドックスな統一である。しかしこれは、神が存在である限りにおいてであり、神が超存在と観られる限りにおいては、神はそれらではなく、プロクロスの「一者」に対応するものである。

次の『三位一体性。マリウス・ヴィクトリヌスによる同一性と差異性の関係のキリスト教的変容』および『差異性の定立としての創造。アウグスティヌス』で著者は、キリスト教の根本概念たる三位一体性を一性ないし同一性として、また創造と受肉とを差異性の現象として捉え、いかに新プラトンの思考がキリスト教の概念の形成を規定しているかを示す。すなわち、ヴィクトリヌスは、三位一体性に、自己の中で区別された諸段階を想定するが、その第一段階は一者自身であり、存在と思考を超えたものである。この一者が「跳び出して」第二の段階に至る時、一者の顕現が起るが、これは一性ないし同一性に止まっている。だが他方、これは、三位一体的に自らを反省する神として、差異性を本質的に含むものである。アウグスティヌスにおいては、創造する神という聖書の思想は、一切の存在者を基礎づける精神

という新プラトンの原理と統一されて、創造の概念が確立される。

更に著者は、『非-区別性を通じての区別。マイスター・エックハルト』で、神と被造物との関連と差異性を、神の内在と超越との弁証法として明らかにする。

続く『クザーヌスの思考の原理としての同一性と差異性』および『絶対的な見る働き、または絶対的な反省(クザーヌス)』では、新プラトンの同一性と差異性の思想が、多くの点でクザーヌスに影響を与え、特に彼の三位一体論が、ドイツ観念論への旋回点になることが述べられる。

次の『差異性なしの同一性? ジョルダノ・ブルーノの宇宙論と神学について』と、『絶対的同一性。シュリングの「ブルーノ」における新プラトン主義的包含』および、『差異性、否定、同一性。ヘーゲル弁証法の反省的運動』では、ドイツ観念論にとって、同一性と差異性の関係が、論理学の形而上学への移行、また宗教の哲学への移行という脈絡の中で、思想の「生きた魂」であることが示される。このことは、特にヘーゲルの弁証法において顕著である。ヘーゲル弁証法の運動によって、差異性は否定として構成的であり、それを通じて概念は絶対的理念となり、自己自身を把握するに至るのである。この理念は、差異性を廃棄しかつ同時に保持するが故に、抽象的・形式的な理念とは反対に、弁証法的ないし具体的な同一性である。著者はかかるヘーゲルの思想に、プロティノス、プロクロス、偽ディオニシウス、マリウス・ヴィクトリヌス、クザーヌスに結びつく円環の完結を見る。

ハイデガーにおける同一性と差異性との関係に対する著者の批判は、クザーヌスについての論文の中で述べられている(131頁以下)。そこでは、ハイデガーの形而上学の歴史に対するいくつかの主張——例えば、プラトンによって同一性の中に置かれた関係が、決定的に現われるまでには、ヨーロッパの思考は二千年以上要した等——は、事実在即していない、いわば「暴力的」なものであるとされ、それに対する抗議として、他者において自己自身を見出す三位一体的な同一性という新プラトンの神学の概念が挙げられている。

最後の、『アドルノの非-同一的なもの』は、認識論的・美学的・歴史的・社会的諸現象における「非-同一的なもの」の普遍性というアドルノの主張に対する批判である。アドルノの意味での「非-同一的なもの」は、プラトン以来の哲学的伝統で考えられた「差異性」と対立するものであり、「同一性」を徹底的に否定するも

のである。すなわち、同一性は、それが思考として理解されようと、社会的現実として理解されようと、抽象性、無反省性、自己を批判的に問わぬ存在であるとされ、固定化され、生命のない「体系」である。かかるアドルノの同一性の解釈によると、プラトンの思想も、ヘーゲルのそれも、「弁証法的」と見做されることはできない。「本来的な」弁証法は、「非同一性の一貫した意識」であり、同一性の「魔力」から自己を解放することを客観的な目標とする。それ故、哲学はただ、批判的な「否定的弁証法」としてのみ意味を有する。これに対して著者は、アドルノの批判は、例えばプロティノスやクザーヌス、カントやヘーゲルの思想構造の「責任ある解釈」には当らず、それはむしろ、形而上学の伝統の歴史的に硬化された墮落形式に対してのみ妥当すると反論する。

以上のごとく、著者は、古代から現代の最先端までを包括する視野で、伝統の再解釈とその擁護を通じて、プラトン主義者としての立場を貫く。そこでは、徹底した文献学的研究と深い哲学的洞察、および明晰な論述の、稀有の調和的結合が実現されている。著者の、概念的思考の可能性と限界を十分に自覚した反省的意識は、伝統に立ち向かう研究者の現代的なあり方として、われわれにとって一つの確実な指針となるであろう。

古田 暁訳『アンセルムス全集』

聖文舎 1980. 1029頁

印具 徹

(1)

アンセルムス研究を生涯かけての大切な仕事の一つとしている私は、主なアンセルムスの著作を、出来るだけ多く翻訳もしなければならぬとかねがね考えていたが、多忙のため、なかなか翻訳に没頭することが出来ず、最近では些か焦りを感じ始めていた。そうしたとき、古田氏によって、アンセルムスの論文のすべてが、この